

# 平成 29 年度研究プロジェクト研究概要報告

研究種別	■ 共同研究 1	公益目的事業 11
主査名	高田邦道 日本大学名誉教授	
研究テーマ	これからの道路交通政策 －幹線道路の道路・交通管理から考える－**	
<b>研究の目的：</b> <p>車両の自動化が現実問題として急速に進行している。一方、超小型車の出現から高齢者の電動車いすまで多種多様な車両の技術開発が進んでいる。このようなモータリゼーションの動向変化に道路・交通管理が対応できていないきらいがある。加えて、観光立国政策を推進するにふさわしい道路・交通管理であるかと問われたら、自動車先進諸国に比べてみると、より安全・安心な道路・交通管理であるとはいえ、外国人が運転するにはかなり難しい道路環境である。</p> <p>このようなわが国独自の道路交通環境にある中、2020 年には東京オリンピックを迎える。さらに、その先は、第 4 次産業革命といわれる AI ならびに IoT といった次世代技術が進展して新しい交通社会の秩序が必要とされることが予想される。この動きに人間の行動がどう対応し、現行の交通運用技術をどう変化させなければならいか。また、現行のわが国の道路管理および交通管理の中で、どう消化していけばよいか、さらには老朽化が著しい社会インフラの改善にどう対処させていけばよいか。これら現実問題として次世代社会への交通技術への橋渡しが必要で、その基本的な研究として、これまでの課題を整理しておくことが重要である。また、ガラ系と称されるわが国独自の道路・交通管理と欧米の自動車先進国といわれている国々との違いを整理しておく必要がある。</p> <p>「道路・交通管理から考えるこれからの道路交通政策」研究の最終目的は、ドライバーのいない自動運転車の道路・交通管理をどのように考えればよいか、地方創生政策を進める上での道路・交通管理のあり方と国際化にふさわしい道路・交通管理への転換の可能性を提案するところであり、平成 29 年度は、幹線道路を対象とした課題を検討することを目的とした。</p>		
<b>研究の経過（4 月～3 月）：</b> <p>第 1 回目では、本プロジェクトの進め方と委員の役割の検討。速度規制と設計速度のあり方など『速度』管理問題。第 2 回目では、高速道路の逆走の問題を駐車場の設計と駐車させ方。逆走行為と法的規制および高速道路の逆走対策の決め手となると考えられる Tiger Claw（虎のカギツメ）の法的問題について西原宗勲委員から弁護士としての見解が示され、道路管理および交通管理の立場からを含めての議論。南部が「ザバー」から中国自動車道の道路企画（設計速度）と規制速度について資料提供があり、高速道路の『設計速度と規制速度』について議論。第 3 回目では、駐車場整備・道路整備・地区交通計画の関連性を議論。第 4 回目では、自動運転自動車の開発の立場から、開発競争の実情とアメリカの社会実験のあり方のレクチャーを受け、これからの道路政策のあり方の議論。第 5 回目では、路側空間のあり方を議論、京都四条通りの車道空間削減の議論、秋葉原地区の駐車場右折入口のための三車線構想の挫折についての議論、第 6 回目では、自動運転車と（道路・交通管理）情報の交換の議論、通路・歩道・路側帯の議論。</p>		
<b>研究の成果（自己評価含む）：</b> <p>①速度規制と設計速度のあり方など『速度』管理問題のまとめ。②高速道路の逆走の問題を駐車場の設計と駐車させ方。逆走行為と法的規制および高速道路の逆走対策の決め手となると考えられる</p>		

## 平成 29 年度研究プロジェクト研究概要報告

Tiger Claw の法的問題についての弁護士としての見解。③駐車場整備・道路整備・地区交通計画の関連性、④自動運転自動車の開発競争の実情とアメリカの社会実験のあり方の把握、⑤路側空間のあり方など。

### 今後の課題：

モータリゼーションの将来道路・交通管理や都市管理の視点でみると、小型化し、完全自動運転車になるまでの混在期間への対応が難しい。これらの課題を受け入れる道路環境の整備やわが国の法制度の受け入れ態勢はできているのか、非幹線道路および幹線道路のあり方を検討してきた。加えて、運輸管理の分野に大きな影響を及ぼすことになることが、予測される。

わが国では、トラック、バス、タクシーはプロドライバーの世界として、これまで安全・安心な運輸管理体制の中にあった。しかし、一億免許保有者時代で、免許保有者が一台保有する時代、加えて物流コストの切り下げの的となり、プロドライバーの給与は上がらず、これまで考えられなかった交通事故が発生するなど、プロドライバーの質の課題が問われている。これまでの運輸管理体制は崩壊の道を歩みはじめている。そのため、自動運転車の普及は、トラックと路線バスへの適用が早まる予測があって、これからの道路交通政策展望の鍵を握っている。

さらに、管理瑕疵責任の社会であるわが国では、自動車のシェアサービスにまで運輸管理が及ぶことに加え、自動運転車時代に合わせて、国際化とともに単純明快な道路管理と交通管理手法が求められており、この条件下で、運輸管理の課題を整理し、これからの交通政策を展望することが重要と考えている。